

BPT (バイオマスプロジェクトチーム)だより No.41

<http://www.pref.chiba.lg.jp/svozoku/e/ichihai/bio/biotop.htm>



平成20年3月31日(月)
バイオマスプロジェクトチーム
(環境生活部資源循環推進課)

1. 事業の進捗状況等

「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員会の開催
3月26日、千葉市内にて、今年度第3回目の「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員会が開催されました。

今回は森林系木質バイオマスの利活用推進における課題の抽出と解決の方法及びバイオマス利活用推進方策検討調査を踏まえた今後の食品残さの飼料化事業の推進について意見交換が行われました。



「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員

G20ちば2008関係イベント

千葉県で国際会議「G20 グレンイーグルズ閣僚級対話」が開催されることに伴い、“千葉産木質プラスチック製品”を広く国内外へPRする機会と捉え、関連イベントに協力しました。

3月9日の記念国際シンポジウム「地球温暖化と生物多様性 from ちば」では、参加した小学生に木質プラスチック製品の配布やパネル等の展示を行いました。



G20ちば2008関係での展示

15、16日のG20 グレンイーグルズ閣僚級対話では、参加閣僚・関係者及び報道関係者に木質プラスチック製ボールペンを配布し、英文パネル及び製品の展示を行いました。

この製品は、木質系バイオマスを原料とする“木質プラスチック”から作られました。千葉県(山武市)で製造される“木質プラスチック”は、サンブスギ(樹皮や端材)や竹材などの地域で発生する未利用資源を原料に活用したものであり、LCA評価によると、石油由来のプラスチック樹脂に比べて、CO₂排出量を55~60%低減します。

環境先進国ドイツのバイオマス最新レポート(その7)

バイオエネルギー村プロジェクト「ユーンデ」(2)

(バイオエネルギー村の実現に向けたプロセスデザイン)

村民らの手による自立したバイオエネルギー村の実現にあたり、“バイオエネルギー村プロジェクト”の展開において、どのようなプロセスと成功要因があったのでしょうか？これまで何も知らなかった村民らが、大学のプロジェクトに関わりながらバイオエネルギー村を担う主役として自覚・自立していくまでのプロセスデザインと、村民の視点から見たキーワードを挙げてみます。

ユーンデ村を動かした“キーパーソン”

当時、プロジェクトの候補地として約40の村々が挙がっていましたが、いち早く行動したのがユーンデの村長でした。村長は、真っ先に村議会でプロジェクトの話をしたいと大学に相談を持ちかけ、早い時期から村民も参加した動きが始まりました。この村長がユーンデ村民と大学を牽引する“キーパーソン”として役割を担っていました。

ユーンデ村と大学の連携を築く“コーディネーター”

当初、大学がプロジェクト推進のためにエネルギーを注いだのは、村民への説明でした。研究者たちはユーンデ村を訪れて、何回も情報交換会を開きました。熱意のある研究者たちから情報提供がなされたことで、村民が「ぜひ、一緒にやろう」という気持ちを持つようになり、大学との信頼関係が築かれていきました。このことは、それから展開されたプロジェクトにおいて非常に重要なプロセスであったといえます。

このプロセスの中心となって、コーディネーター（橋渡し）役を担当したのが大学の2人の研究者でした。現在もこの2人の研究者は、ドイツ各地で新たに始まっている8つのプロジェクトを担当する責任者となっています。

プロジェクトを推進させる“ビジョンの共有”

当時の村民は大学のさまざまな専門家との意見交換によって、プロジェクトが“なぜ必要なのか”、“その目的は？”、“どんなメリットがあるか”、“何をすれば良いのか”などの多くの情報とビジョンを知ることができました。そして、地球環境に対して大切なことをしているという意識が醸成されていき、さまざまなインセンティブから“自分たちがプロジェクトを担う主役である”と自覚するようになりました。いまでは、バイオエネルギー村は、村民にとって重要なアイデンティティーにつながっています。

プロジェクトを村に浸透させる“機運の醸成”

プロジェクトを村民に啓発・浸透していく手段として、ドイツで発達している地域のさまざまな協会（地域活動組織）にその役割を割り振ることで、効率的に村民の理解を図る取り組みが進められました。

また、ドイツの伝統的な5月祭りでも、村の人々が集まったところで村長から「いま、この村にこんな話があります」とプロジェクトについて語ることも行いました。このような取り組みによって、徐々にプロジェクトが村民に浸透したことで、プロジェクトに対する機運醸成や協力体制が村の中で整っていき、村民によるバイオエネルギー供給事業の健全な経営が実現したと考えられます。

第5回地域LCA協議委員会の開催

（LCA：ライフサイクルアセスメント）

3月21日、(独)産業技術総合研究所LCA研究センターと千葉県を構成メンバーとする地域LCA協議委員会が開催されました。

今年度最後の開催ということで、市町村合併を考慮した可燃ごみ処理の広域化の提案、社会的便益を考慮した一般廃棄物の分別・有料化施策及び家畜ふん尿処理・利用システムの環境影響評価の成果報告の後、意見交換を行いました。



地域LCA協議委員会

2. 普及啓発活動

温暖化防止シンポジウムでの講演

3月8日、麗澤大学プラザホールにて「かしの未来をスケッチしよう～バイオマスの利活用について考える～」をテーマとした温暖化防止シンポジウムが開催され、バイオマスプロジェクトチームから講演を行いました。

パネルディスカッションでは、世界のバイオマス利用の動きや剪定枝の利活用について質問や意見が出されました。

市町村勉強会

3月5日、県庁会議室にて市町村勉強会を開催しました。今回のテーマは「木質バイオマスの利活用の状況」とし、木質プラスチック事業の進捗状況や木質ペレットへの取り組み等の説明を行った後、意見交換を行いました。